

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。
また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

英国内務省

現地調査報告書

ハルツーム，スーダン

2018年8月10日～17日に行われたもの

2018年11月

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

4. 移動の自由

4.1 出国プロセス

4.1.1 Dahiya中将[Lieutenant-General : LG] (LG Dahiya) とその同僚は、スーダン人がスーダンを出国する際に義務付けられる行為を説明した。

「...出国ビザが[...] が必要となる。出国ビザはスーダン全域に所在するパスポート事務所（首都ハルツーム[Khartoum]には5か所に主要な事務所がある）で申請することができる。申請者は、有効なパスポート、兵役を終了したことを示す証拠及び渡航理由書を提出しなければならない。たとえば、どこに留学しようとしているのか、又はどこで医療を受けようとするのかについての証拠が必要となる。出国ビザの手数料は105スーダン・ポンド（およそ2米ドル）である。ただし、たとえば、刑事訴訟が係属中である場合、当事者の渡航は禁止される。また、政治的な理由により禁止されることもある。渡航が禁止される人々の情報は、電子データベースである国家アラート/ウォッチリストに保存されている。

「出国ビザが発行される前に航空券を購入する必要はない。出国ビザは国境を越える際に必ず必要となる。行先がエリトリア又はリビアの場合、入国ビザは不要である。ただし、入国地点で10米ドルという少額の手数料を支払わなければならない。行先がエジプトの場合、50歳未満の男性はビザが必要となるが女性は不要である。

4.1.2 LG Dahiyaは、以下のように言葉を継いだ。

「空港を経由してスーダンを出国する場合、出入国警備職員によりパスポートをチェックされる。その際、渡航文書の有効性と身の回り品も検査される。出国ビザはデータベースと照合され、また、出国者が渡航を禁止されていない又は国家から指名手配されていないことが検証される。

「偽造パスポートがあまり問題になることはないと伝えられている。これは電子生体認証パスポートが既に導入されているからである。

「欧州への入国ビザの中には偽造されているものがあることが確認されているが、これは時折、航空会社によって検知されている。

「空港を経由して密入国が行われているという話は聞いたことがない。」

4.1.3 複数の情報筋が出国プロセスに関するLG Dahiyaの説明をそのまま繰り返した。

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

IOM職員は、ハルツーム国際空港から出発する際の手続きを詳細に説明した。

「出国しようとする者（外国人及びスーダン人）は、空港を通過するために出国許可を必要とする。スーダン人が必要とする出国ビザは1枚の書面である。外国人が必要とする出国ビザは、原入国ビザ（短期訪問者の場合）に含まれているか、又は長期在留者の場合、別個の入/出国スティッカーという形態になっている。

「乗客が空港ビルの出国エリア内に入ってすぐのところにカウンターがある。このカウンターは国家情報治安局（national intelligence and security service : NISS）によって運営されていると理解されている。NISS はここに臨時で検問所を設置することができる。出国チェックは、警備員のところを通過した後の手荷物エリアの右側で行われる。次の段階は、航空会社デスクでのチェックインである。チェックインが済めば、乗客はNISSの検問所に進む。NISSはパスポートと搭乗券を確認する（このチェックは出国する全乗客に対して行われる）。次いで、搭乗エリアに進む。このエリアでは、警察による入国チェックも行われている。

「... 出国ビザ取得プロセスは、全てのスーダン人にとって同じである。出入国管理事務所へ行って出国ビザを取得しなければならないが、空港で取得することも可能である。スーダン国内のIOM職員であっても出国ビザが必要である。このビザなしに出国することはできない。

「空港には、スーダン人の出国ビザを検査するための電子システムがある。IOMは現在、その入/出国電子システムをグレードアップするため。スーダン政府と協議しているところである。

「しかしながら、IOM職員によると、実際のところ、このチェックは出国者の氏名に基づいて行われているだけである。なぜなら、このチェックは（同職員の経験では）空港でNISSの検問所を通過する際に行われるからである。

4.1.4 一方、欧州大使館Aの職員は、以下のように考えている。

「一部の庇護希望者は、出入国管理警察から手渡されたものだとして、本人のスーダン出国が禁止されている旨が記された書式を提示している。この欧州大使館職員はこの書式の存在を検証しようとしたが、出入国管理警察はそのような書式を知らないと言った。しかしながら、人々がスーダンから出国するのを禁じることができる法律が存在する。こうした法律が適用される場合、たとえば、庇護希望者は犯罪活動又は薬物関連容疑で出国ビザ

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

の交付を拒否されるので、本人は出国できないことを知ることになる。

「NISSの「ブラック管理リスト（Black Control List）」は存在する。このリストに掲載された者は、警告を受けない可能性がある。この対象者は出国できず、出国しようとするれば空港で身柄を拘束される。渡航禁止の例として、ある野党党員が政治イベントに出席するために渡航しようとしてスーダンを出国するのを禁じられた。しかしながら、この人物は、スーダンと米国の二重国籍を持っていたので、家族を訪問するために米国へ渡航することを認められた。渡航禁止措置は必ずしも恒久的なものであるとは限らない。」

4.1.5 欧州大使館Bの職員は、以下のように述べている。

「出国ビザは、150SDG（スーダン・ポンド）の費用がかかる。警察は申請者に残債や犯罪記録がないかどうか検査する。同大使館職員によると、時折、同じ氏名によって問題が生じる場合がある。逸話的に話せば、出国を認められない者に類似する名前である場合、問題が起きる可能性がある。」

「FFMチーム・メンバーは、政府が保有するデータの完全性に関してこの類似氏名のポイントが問題を提起する可能性があるとし唆し、政府のデータベースはどれだけ「優れているのか」と質した。スーダン政府はセキュリティに多額の資金を費やしており、広大なネットワークも有しているが、このデータベースがどの程度高度なのかについては確かでない」と政府職員は回答した。」

4.1.6 人権擁護者（Human Rights Defender）は「ある者が偽造パスポートで出国しようと試みた場合、空港で検知され、身柄を拘束される可能性が高い。」と考えている。

4.1.7 Siddig Yousefは、政府が時折政治的活動家の出国を制限するとして、「...野党指導者と人権活動家は海外渡航を禁じられ、NISSがそのパスポートを没収することがある。また、こうした人々は、海外渡航し、スーダン国外で行われる活動に参加した場合は特に身柄を拘束されることもある。」と述べている。

4.1.8 他の情報筋は、LG Dahiyaが説明したプロセスの内容に概ね同意したが、実際のところ、手続きはそれほど組織的に踏まれていないことを示唆した。ある政治学者は、以下のような見解を述べた。

「スーダンを出国する際、出国ビザとパスポートが必要である。問題は出国ビザの取得である。出入国管理事務所に行き、航空券を見せ、出国理由を説明しなければならない。出

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

国者が24歳未満である場合、又は海外から正式な招待状を受け取っていない場合、本人の出国を支持する誰か年上の人を必要とする。全ては、個々の意思決定者の権限下にあり、出国ビザの交付を拒否された場合、不服申立を行う機会はない。しかしながら、出国ビザの発行は警察の職務であるが、NISSが立ち会い、決定を下す。パスポートとIDカードは取得するのが容易であるが、出国ビザはより難しい。

「PSによると、2013年頃まで、ビザなしでエジプトに行くことができたが、現在はエジプトが乗り継ぎ地であることを政府が認識しているため、エジプト行きはより難しくなっている。しかしながら、出国者は賄賂を使って空港から出国することができ、不可能なことは何もないとPSは語った。」

4.1.9 一方、Dr Ahmed Eltounは、以下のように述べている。

「... 空港ゲートの警備は、国家情報治安局（NISS）ではなく、民間の請負業者が提供している...」彼は、空港での警備が厳重である又は出国管理カウンターを通過する際に徹底したチェックが行われるとは考えていない。たとえば、グループ内の1人が他の構成員のパスポートをまとめて提出した場合、個々のパスポートは徹底的にチェックされないことを彼は暗示した。このような状況によって、密輸業者が対象者を出国させるのがより容易になった。空港を通過させ、人々を密出国させるのが容易になっているのである。ただし、現在は英国への直行便がないので、英国へ行くことはより難しくなっている。

「出国ビザを持たずにリビア又はエチオピアの国境を越えてスーダンを出国することは可能である。」

4.1.10 IOM職員は、ハルツーム国際空港でのプロセスを概説した後に続けて、「政府制度の主要な問題は、運営方法の一貫性に限界があることだ。出国プロセスの運営方法について指摘することは難しい。制度内には一定レベルの非公式性があり、規則は常に明快であるというわけではなく、地域によってばらつきがあることを示す証拠もある。」と述べた。

同職員はさらに、スーダン国境を実際に管理する際の困難さについて語った。

「... スーダンは、6~7,000kmに及ぶ国境を有しており、公式の検問所がどれくらいあるのかは不明であるが、IOMは22か所あると推定している。国境の大半は規制されていない。多くの人々が違法にスーダンへ入国しており、また、違法に出国することも容易である。

スーダンは陸の国境用の出国ビザも用意していると想定されているが、これが執行されて

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

いるようには見えない。多くのコミュニティが国境を跨いで存在しているため、日常ベースで常に文書なしで国境越えが行われている。

「... [上記に付け加えて] スーダン全域の出/入国制度について一般化することは極めて難しい。たとえば、スーダン/エチオピア国境で、エチオピア人は地元のみを訪問する場合であればビザなしでスーダンに入国することができる。エチオピア人がスーダンの地元地域を超えて入国する意図がある場合、その旨を宣言しなければならないとされているが、宣言する責任はあくまでエチオピア人にあり、出入国管理職員がチェックするわけではない。スーダン当局は出/入国を管理する一定の能力を有しているが、スーダンは巨大な国境を抱えており、警らするのは困難である。

4.1.11 ハルツーム国際空港からの[出国に関するFFMチームの観察報告書](#)も参照された。

出国ビザなしの出国に対する刑罰

4.1.12 LG Dahiyaは、スーダン政府を代表して、実際のところ、出国ビザなしで出国する行為に対する刑罰は一切ないと語った。

4.1.13 一部の情報筋は、LG Dahiyaと同様の発言を行った。Dr Ahmed Eltounは、以下のような見解を述べた。

「理論的には、出国ビザを有していないことに対する刑罰があるものの、これは処罰されるような犯罪でない。一般に人々をビザなしで「通過させている」。たとえば、アルジェリアとヨルダンからの帰還者273人は、出国ビザなしでスーダンを離れたが、帰還時に如何なる刑罰も科されていない。したがって、緊急渡航文書（Emergency Travel Document : ETD）で帰還し、合法的に出国したことを示す証拠がなくとも、大きな問題とはならなかった。

「出入国管理局は、人々の身元をチェックし、NISSが誰に干渉できるかをNISSに対して知らせる。出入国管理官の大半はヌバ[Nuba]族出身である。Dahiya将軍（スーダン政府の出入国管理局長）もヌバ族出身である。」

4.1.14 欧州大使館Aの職員は、「経験から言えば、出国ビザがないことで帰還できなくなる可能性を示す証拠は一切ない。これはスーダン人のレセパセでスーダンに到着する帰還者（すなわち、スーダンからの出国が合法であったことを示すパスポートを所有してな

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

い) の数が証拠である。空港は出国ビザがないことを気にしない。」と説明した。同様に、ノルウェー大使館職員と欧州大使館Bの職員も、出国ビザなしで出国していた帰還者が問題に直面したという話を聞いていない。

4.1.15 IOM職員は、2016年から2018年にかけて1,500人以上の帰還者を取扱った組織であるにもかかわらず、出国ビザなしで出国した帰還者が「そのために問題を経験したかどうかに関する情報を一切有して」いなかった。

4.1.16 しかしながら、前記の政治学者は出国ビザなしで出国すれば問題を招くことになると考えているが、具体的な事例は有していなかった。

4.2 入国プロセス

4.2.1 英国大使館（英国からの帰還プロセスに関与していない）を除く全ての欧州大使館とLG Dahiyaは、帰還希望者が自己の渡航文書（パスポート）を所有していない場合、スーダンへ帰還するためにはスーダン当局が発行するレセパセが必要になると語った。

4.2.2 LG Dahiyaは、以下のように説明した。

「帰還者に対して行われるチェックに関して、帰還者は到着した際、パスポートにスタンプを押される。その帰還者が指名手配されている、すなわち、ウォッチリストに載っていることがわかった場合、その身柄が警備職員に引き渡される。出国ビザの証拠がない場合、その帰還者がスーダンを違法に出国した方法と理由を確認するために取調べを受けることになる。出国ビザなしで出国したことに対する刑罰は一切ない（ただし、一時的な渡航禁止処分を受ける可能性がある）が、当局は帰還者がスーダン人であることを明確にする必要がある。

4.2.3 IOM職員は、ハルツーム国際空港での入国プロセスについて説明した。

「[到着した時点で] 帰還者はまず入国管理局（パスポート・市民登録公社[Passport and Civil Registration Corporation]の一部である警察）へ向かう。次いで、手荷物保安検査を受けた後、NISSが運営する第二入国管理デスクに行く。このプロセスが全て済んだ後で、乗客は荷物受取ホールに進む。

「第1デスクでは、帰還者の個人情報（氏名その他）に関するチェックが行われ、その情報は警察官によって電子的に記録される。アラート（警戒）リストがある。」

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

4.2.4 ハルツーム国際空港に到着した状況に関する[FFMチームの観察報告書](#)も参照されたい。

4.3 パスポート、ID番号及びカードの取得

4.3.1 LG Dahiyaは、「パスポートを取得するには、国民番号が必要である。我々は、スーダン人の90~95%の生体データを市民登録データベースに記録させている。誰かがパスポートを申請する場合、データが同システムから取り出されるか、又は指紋を採取することでデータを得ることができる。指紋は12歳以上の全ての人から採取される。」と説明した。

4.3.2 また、LG Dahiyaは、市民登録局とIDの番号及びカードを取得するプロセスに関する詳細情報を提供した。

「... [スーダンでは]2,900万人の市民が国民番号を登録している。そのうちの900万人は児童（12歳未満）である。これらの数値は、2008年国勢調査に基づいている。FFMチームは、スーダンの人口がおよそ4,000万人[英国のDfID職員が提供した数値]であると聞いていると語った。とすれば、GDはどのようにして国勢調査が正確だとわかったのだろうか。国勢調査の正確性は保証できないとGDは語った。

「市民全員を対象にした国民番号の登録は2011年に開始された。スーダンの全域に亘って73の登録センターが常置されている。また、登録を確実に行わせるため、1,400の移動部課チームが18の州に派遣された。

「登録が全面的には終了していない特定の地域があるものの、全体的な指標は全国の対象者の80%が登録していることを示唆している。一部の地域は他よりも低い登録率となっている。ダルフル（Darfur）地方と南コルドファン（South Kordofan）州の治安情勢が改善するにつれて、これらの地域で開始された登録プロセスを完了させる目的で追加データを収集するため、より多くの移動部課チームが派遣される予定である。

「銀行口座の開設や通学などの政府サービスを利用するためには国民ID番号が必要である。」

4.3.3 LG Dahiyaは、国民ID番号を取得するための要件を説明した。

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

「... 市民権を得るための条件には、スーダンで出生したスーダン人の両親の元に生まれることが含まれる。他の国々の市民は、たとえば、帰化など特定の条件に基づき市民権を得ることができる。国民IDカードを発行する際、申請者がスーダン人であることを確認するために市民登録データベースがチェックされる。

「国民番号が発行される前に国籍を確認するため、陳述書が取られる。身元を証明するには、男性の証人2人（親族又は部族の長老）が必要になる可能性がある。証人となる近親者がいない場合は、4人の証人が必要となる可能性がある。

「国民ID番号は無料なので、全市民が取得できる。政府サービスの大半は無料である。」

4.3.4 IOMは、帰還者がIDの番号又は文書を取得するのを支援しない。

4.3.5 [ID 番号及びカードへのアクセス](#)も参照されたい。

偽造された及び不正に入手された文書

4.3.6 LG Dahiyaは、「偽造パスポートが問題になることはないと伝えられている。これは特に、電子生体認証パスポートが既に導入されているからである。欧州への入国ビザの中には偽造されているものがあることが確認されているが、これは時折、航空会社によって検知されている。」と語った。

4.3.7 しかしながら、欧州大使館Bの職員は、偽造されたスーダン渡航文書を入手することが可能かどうか知らないが、「逸話的には、偽造と汚職が問題であるというマスコミ報道がなされている」とコメントした。汚職全般に関して、ノルウェー大使館職員は「トランスペアレンシー・インターナショナル（Transparency International）の腐敗認識指数（Corruption Perception Index）によると、スーダンは世界で最も腐敗した国の一つである。腐敗はトップから始まり、あらゆるレベルに浸透していく.. [が]汚職の具体的な証拠は有していない... しかし、汚職が発生する条件は整っている。」と語った。

4.3.8 [ID番号及びカードへのアクセス](#)も参照されたい。

4.4 検問所及びスーダン国内の移動

スーダン国内の移動全般

4.4.1 スーダン人が国内の大半の地域を移動することは一般に可能であると考えられる情報筋

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

もあれば、具体的なコメントを出さない情報筋もある。Siddig Yousefはセキュリティが問題ではあるものの、スーダン人はどこでも移動できると考えており、IOM職員は「スーダン人は国内を『自由に』移動できる―[スーダン人は][他の外国人と異なり]移動許可証を必要としない。」と語った。Siddig Yousefは、「[スーダン国内を]移動するのにIDカードが必要だとは考えていない。ただし、国内便を利用する場合は別である。この場合、ID番号の写しを持っておく必要がある。しかし、この写しは空港で保有されていなかった。」と語った。

4.4.2 同様に、市民社会団体活動家は、以下のように述べている。

「国内を移動するのは容易である。路上検問所が幾つかあるが、特定の標的になっていない限り、ここでチェックされることはない。我々の団体は、バスが検問所で停車させられたという話を聞いたことがない。

「空港を経由して移動する際にIDの写しを置いていく必要はない。国内便の場合、IDカードを見せる必要がある。手荷物はチェックされる。『高級な』機器を携行している場合、疑わしい人物とみなされる可能性がある。携帯電話は、活動家にとって最も不利な証拠となる恐れがある。」

4.4.3 また、人権擁護者は「国内を移動するのに、身分証明書は不要である。しかしながら、国内便に搭乗する場合、全乗客がIDのコピーを提出しなければならない。」と語った。

4.4.4 2つの情報筋のみが、ハルツーム内の移動についてコメントしたが、ともに検問所について知らなかったと語った。ノルウェー大使館職員は、「...ハルツーム内を頻繁に移動したが、市内に検問所があることは知らなかった（ただし、外交官として移動する際、常に外交官用車両を使用していたと付け加えた）。国境には検問所があるが、車両が常に停車させられるとは限らない。」と語った。一方、人権擁護者は、「ハルツーム周辺を移動することに関する制限は一切ない。深夜（午前0時以降）になれば市内の特定場所に検問所が設置されるかもしれないが、これは全ての人々に影響を及ぼすものである。これらの検問所は、たとえば、犯罪やクーデターの抑止力になる可能性がある。」と語った。

ダルフルとハルツームの間の移動

4.4.5 コメントを寄せた情報筋は、様々な組織が要員を配置している検問所はあるが、ダルフルと首都ハルツームの間を移動できるということで概して意見が一致している。

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

4.4.6 ダルフールの大学教授は、「検問所は多いが、警察や警備の検問所も以前ほど多くはない。NISSや軍情報機関の検問所もある。軍情報機関は質問をしない。ただ戦闘員を探しているだけである。」と語った。Siddig Yousefは「...ダルフールとハルツームの間を移動するのに問題がある」とは考えていないものの、「強盗が車を停止させることがあるので、人々は日中に移動するようにしている... 警察の検問所で問題が起きるとは考えていない。」と語った。ベルティ王 (King of the Berti) も、ダルフールとハルツームの間を移動するのに「問題」があるとは考えていない。

4.4.7 同様に、Salih Osmanは、以下のように考えている。

「... [移動するのが]これまでよりも容易になり、また、より寛容な姿勢で受け止められるようになった。ただし、ダルフールのキャンプで生活するNAD[non-Arab Darfuri : 非アラブ系のダルフール住民] IDPはこの恩恵を受けることができない。

「...ダルフールとハルツームの間をバス又は飛行機で移動することは可能だが、大半の人々にとって航空券はあまりにも高額なため、空路を利用することができない。

「ダルフールからハルツームまでの経路上には、これまでであれば料金を徴収していたジャンジャウィード (Janjaweed) の検問所がもはや設置されていないが、政府やNISSの検問所は依然として存在する。緊急事態のときなどは問題が出てくる。特に、人々は検問所で身元を特定され、逮捕される可能性がある。NISSは人々を追跡する能力を有する。」

4.4.8 HRDは、以下のように考えている。

「ハルツームとダルフールの間をバスで、時には列車で、また、ハルツーム空港から飛行機で移動することは可能である。ハルツームからダルフールの州都エル＝ファーシル (El Fasher) までは定期バスが運行されている。ただし、料金は必ずしも移動を希望する人々の収入の範囲内に収まるとは限らないため、人々は若干の料金を支払ってトラックの荷台の上に乗って移動することがある...ダルフールとハルツームの間には、旅行者全員に影響を及ぼす道路検問所がある。紛争地域においては、市の入り口に検問所が設置されている。ダルフールに向かう方に検問所があり、一部の人々が身体検査を受けるので、全ての集団が影響を受ける。ID番号はチェックされない。検査は、様々な集団が、薬物、武器など様々な物を探そうとして行う。検査は恣意的である。」

活動家は「ハルツームからダルフールへ移動する際、NISSに届出て、書式に記入しなけれ

当翻訳は、出入国在留管理庁による仮訳であり、正確には原文に当たってください。また、今後当仮訳は精査の上、変更されることがあり得ることに御留意ください。

ばならない」と語ったが、この手続きは国連の飛行機で移動する場合に適用されるとも説明した。活動家は旅行制限を課されているが、一般の人々についてはそのような制限が一切ない。しかしながら、ハルツームとダルフールの間には、多くの検問所がある。空港にはNISSがある。前記の政治学者は、「ハルツームへ行くのにそれほどの努力を必要としない。トラックに乗って行くこともできる。途中には検問所があるが、それほど多く尋問されるわけではない。旅行者はただ、暴力から逃れ、安全を求めてハルツームへ向かっていると答えるだけだ。武器を持っていない限り、また、既に反政府集団との関係を疑われていない限り、手続きは一般にスムーズである。」と語った。

4.4.9 ダルフールへ戻ることについては、英国のDfID職員は「非アラブ系ダルフール住民がダルフールへ戻るのかどうか疑わしい。」と語った。ダルフールの大学教授は、ある人物がIDカードの申請を裏付ける証拠を得るためにダルフールへ戻らなければならない場合、「その者はダルフール当局から活動家として見られる可能性があり、その者が若く、大学卒であれば尚更そのような人物に見られる結果、セキュリティ・リスクと認識されてしまう。一部の人々はダルフールに戻らず、国民ID番号の取得をあきらめることを選択している。」と語った。

ダルフール内の移動

4.4.10 ダルフールの一部は、移動するには依然として危険な状態が続いている。ダルフールの全域に亘って検問所が設置されており、アラブ人の民兵がダルフールの周辺地域や国内避難民（IDP）キャンプを支配している。エル＝ファーシル（El Fasher）やジュナイナ（Geneina）、ニャラ（Nyala）など主要な都市の外には正規軍が配備されていない。政府は、全ての若者をこの地域の脅威として見ている。これは、若者が反政府勢力の主要な募集層であり、今後、反政府戦闘員となり得るからである。

4.4.11 しかしながら、検問所の数は、減少しているように見える。人権擁護者は、「ダルフールでの紛争が終結して以来、検問所の数は減少してきている。検問所は現在、民兵ではなく政府によって運営されている。HRDは、ダルフール内のエル＝ファーシルとニャラの間の道路を例に挙げた。紛争中は検問所が15か所あったが、現在は3か所のみである。」と語った。

4.4.12 治安情勢に関する議論については、[ダルフールにおける治安・政治情勢](#)を参照されたい。